



原田牧場 Note

page 23

携帯やパソコンで検索すれば、どんな情報でも出てくる時代ですが、田舎は違います。情報や口コミが集まる場所は、昔も今も美容院（理髪店）じゃないかと思っています。大阪から引っ越してきた当初、アレルギー持ちの私は、定期的に通院する病院を探していました。牧場の母さんが「美容院で聞いてきてあげるわ」と言ってくれて、ん？美容院？と首を傾げましたが、名古屋から来た先生でよく話を聞いてくれるらしい！と情報をもらい、大阪で受けていた診察を引き継いでもらえる病院がすぐ見つかりました。

美容院に行くと、ひととき日常を離れてリラックスでき、いろんなことを話します。髪と健康状態は繋がっているので、最近の体調の話から、身体に良い食べ物の話、整体院、病院の口コミ話にもなりやすいのかなと思います。美容師さんと一対一なので家族の話や困りごとの話もしやすいですね。今回も、美容院からの情報で解決に向かった話をしたいと思います。

我が牧場の関係会社に、子牛の哺育センターがあります。人手不足なので随時求人を出しており、いろんな方の応募があります。その中のひとり、私と同世代の女性で、試用期間で終わった方がいました。元は家業の牧場手伝いをしていたのですが、牧場を廃業されて働きに出たら、どこも続かないとのこと。哺育センターは、子牛も人も多く、スピード感も必要だったので、構成員の個人牧場なら家族的な雰囲気働きやすいのでは？との提案でしばらくはアルバイトされていましたが、そこも任期満了になったと聞き、気になって声をかけに行きました。「次の働き口はどうするの？」と聞くと「病院へ行ってみた方がいいのかな、って」「何かありましたか？」「酪農の仕事が難しくて、考えてるうちに遅いって怒られたり、ミルクやる順番間違えちゃったり…不安が大きくなってきて」

確かに、酪農はその家々でちょうどいい塩梅が異なります。子牛の寝藁を変えてくれと言われても、藁は押さえつければなんぼでも入るのです。どれくらいフワツとなのか？目安が曖昧。水槽を洗ってくれと言われて、隅々の小さな汚れも丁寧に洗っていたら、まだやってるの？そこまでやらなくていいんだよ！と。早くキレイにできるなら完璧にやって欲しいけど、時間がかかるならそこまでは結構、と。その家の望む感覚を掴むのが難しい。

「コップにすり切りいっぱい、のように誰でもわかる量が決まっていればできるのにね！」「そうなんです。乳房炎とか子牛の不調も難しくて。」と眉間にシワを寄せて本当に困った、という顔をしていました。

とにかく精神的な不安の解消が第一優先だなと感じて、次の仕事の話はせずに、その日は別れました。数日後、散髪の日だったので、美容師さんに何気なくその話をしていると、同級生がそういう相談にのってくれる施設職員だよ、と紹介してくれることになりました。田舎の心療系の病院予約は2ヶ月待ち。病院じゃなくてもすぐに話を聞いてもらえたら、彼女の不安が楽になるかな、と思って話してみると「行ってみます」とのこと。彼女のご家族にお伺いも立てずに差し出がましかったな、と後で思いはしたけど、体が動いていました。面談当日は、施設職員の方がフランクかつとても丁寧に質問してくださって彼女もするすると話をしてくれました。私以外にも、友達の紹介で別の町の施設に相談に行った、との話も出て、施設と施設は情報共有もしていますよ、と。彼女にも笑顔が出ました。酪農のように家主の感覚に左右される仕事じゃなかったら、不安にならずに持てる力をもっと発揮できるのかもしれない。でもやっぱり、家業で慣れた酪農の方がいいと思い直すかもしれない。決めるのは彼女だけど。「元気になって、次の仕事が決まったら、たこ焼きパーティーしましょうね！」と約束して帰路につきました。

（道中の雑談で私が大阪人だと言ったら、好きな食べ物はたこ焼きです、と言ってくれたので）

施設職員の方のお話では、昨今離農が増え、彼女のように家業が廃業して外へ出たら、仕事が続かない方が増えている。北海道では冬道を運転しての通勤も難しいため家に引きこもってしまう状況も増えている。地域によっては送迎付きの就労支援牧場もあり。いろんな人の手を借りて地域で見守っていかれたら！と思います

ここで書くことの意味をずっと考え続けて23回目。
皆さんの連載を読むうちに、私の中でじわじわと広がったものが今回の行動になったと思います。対人援助マガジンと酪農。どんなに遠く離れたものでも相互理解が生まれるものと信じて、もうしばらく書かせていただきます。



面談終わってホッとしてパフェ
緊張がとけてからの雑談、
楽しかったです

筆者 原田 希

1973年 大阪府吹田市生まれ

2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ

2017年 北海道農業士に認定 北海道指導農業士の夫とともに新規就農者の支援を担当